

## 第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

### 報告書資料 一般 - 92

学校名・団体名	岡山大学教育学部附属小学校
HPアドレス	<a href="http://www.okayama-u.ac.jp/user/fusho/">http://www.okayama-u.ac.jp/user/fusho/</a>
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	図工科における「本物」との出会いから深まる 学び
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>図画工作科の領域の中では、表現活動と同様に鑑賞活動が重視されている。学校内でも作品の画集や写真等を見て鑑賞をおこなっているが、「本物」の作品や芸術家と出会うことは、画集や写真では味わえないよさがある。作品の質感や色味、形状についても本物に勝る鑑賞物はない。また、実際に芸術家が製作している様子を見ての感動や芸術家の発する言葉の重みは児童の心に響くものである。そこで本活動は、小学生の発達段階に合わせて鑑賞活動を取り入れた授業を考え、児童が「本物」に触れ、造形的な学びを深めていくことを目的としている。</p>	

「本物」との出会いを通し 子供が生活や社会の中で 豊かに造形にかかわっていく授業づくり  
「やきもの ほんもの すぐれもの」(第4学年) ※平成29年9月～11月に実践(全11時間)

## 1 はじめに

図画工作科における表現と鑑賞の能力の関係は、「それぞれに独立して働くものではなく、互いに働きかけたり、働きかけられたりしながら、一体的に補い合って高まっていく活動である」と新旧学習指導要領で述べられている。「表現は“作品をつくる”が、鑑賞は“自分なりの意味や価値をつくる”」とも言われ、このことから双方の活動を充実させていくことが大切である。特に、鑑賞活動がその後の豊かな表現活動を支えていくと考えると、表現のみに終始するのではなく、鑑賞活動を工夫し、充実させていくことが非常に重要となってくる。これまで私は個人実践発表会の場において、表現と鑑賞を双方向的に深くかわりあわせ、どちらの能力もより一層高めていくことができる授業づくりを目指し、2度の実践をおこなってきた。その際、どちらの授業でも芸術家を招き「本物」との出会いを絡めたことで、子供が大きく影響を受け、授業構成(「鑑賞①→表現→鑑賞②」,「表現①→鑑賞→表現②」)は違っても、表現したことが鑑賞対象を深く見る目につながり、また逆に鑑賞で感じ得たことが表現の変容に生かされていくといった、双方の造形的な力を高めた姿を作品や発言等から確認できた。特に鑑賞する際、「本物」の芸術家とその強いテーマ性のある作品に出合ったことで、子供が芸術家の形や色に対する捉えや熱い造形への思いを肌で感じ取れたからこそ、自分の表現にも生かしていこうと試み、造形的なものの方や感じ方に変化を与えられたのではないかと考えている。

そこで今回も、表現と鑑賞を一体化させ、双方の能力が高まっていくような授業づくりを引き続き目指した実践授業を考えていくとともに、「本物」をより子供の身近な生活や社会にかかわるものに関連づけ、授業づくりをおこなってみることにした。

## 2 実践テーマの理由

これまで「本物」とは、芸術家本人とその実作品、目の前の材料そのものを指して用いており、レプリカや複製画、映像ではなく、生の作品の迫力やタッチ、芸術家の造形への思い、制作の様子などを子供が感じ取れることを大切にしてきた。その際、発達段階に合わせ、子供が興味をもつことのできる材料やテーマで活動する芸術家や、過去に経験したことのある描画材を使った作品を選ぶなど、子供が意欲的に表現と鑑賞に向かうことができるような親しみもてる「本物」を吟味した。

今回、子供が親しみもてる造形、美術の存在を考えたとき、身近にある“日常で使うもの”が挙げられるのではないかと考えた。普段子供はほとんどがガラスやプラスチック、陶器でできた既製品の食器を使っている。アンケートの結果、その食器に対して思い入れのある子供は少なく、「なんとなく食卓に出ているから使っている」といった理由が多く、身近な造形対象としての意識は薄いと感じた。

そこで、このような子供の実態をふまえ、子供がカップを自分でつくり、それを家へ持ち帰り、家庭生活の中で実際に使ってみるところまで経験させたいと考えた。つくったものを生活に生かしていくという、授業後の家庭での実体験までも「本物」という意味に含んだ実践を今回考えてみることにした。

新学習指導要領でも、生活や社会の中の形や色、美術、美術文化などと豊かに関わる資質・能力の育成を目指すことが明記されていることから、これからの子供達は生活を美しく豊かにする造形の働きについて理解を深めていくことが期待される。本実践を通し、子供が自分の生活の中に生きる造形の存在に意味を感じるとともに、これからも意欲的に造形にかかわっていくとする態度をもち続けていってほしい。

## 3 本題材の特徴

本題材は、以下の2点を特徴として考えた表現・鑑賞活動である。

### ①子供の不安を解決してくれる“焼き物づくりのプロ”，松田氏との出会い

子供達はこれまで本校の図画工作科カリキュラムに基づき、1～3年生まで毎年粘土による立体づくりを経験している。

1年生…油粘土(丸める・のぼす・ちぎる・くっつける)を中心とした半立体の作品づくり)

2年生…土粘土(穴をあける・のぼす・つまむ)を中心とした量感を大切にした立体の作品づくり)

3年生…石粉の混ざった土粘土(芯材を使う・どべで接着、修正をおこなう・着色する)を中心とした段階を踏んで仕上げる立体の作品づくり)

そして4年生では新たに「焼ける粘土」を扱うことを子供達に知らせた。

また、今まで飾ったり保管したりする作品が多かったが、今回は「使うものをつくる」ということも子供達に知らせた。すると子供達は「穴があいて飲み物が漏れるのではないか」「生焼けで粘土が残るのではないか」「使えるものが本当に自分の手でつくれるのだろうか」と不安を多く挙げた。そこで、“焼き物づくりのプロ”に粘土の扱い方やつくり方を教えてもらうことができれば不安が解消されるのではないかと、という方向に話題を進めていった。

今回、“焼き物づくりのプロ”として岡山県瀬戸内市にある寒風陶芸会館の元館長である松田竜也氏にご協力いただいた。備前焼の説明を聞いたり、松田氏と共に焼き物を鑑賞したりすることで、共通事項で示された形や色、イメージなどを有効な手がかりとして、子供が自分なりに理解を示しながら作品を味わうことができるようにした。また、作品づくりの段階でも松田氏に示範していただくことで、表現技法などを子供が直接プロから“見て知る”ことができるようにした。そして戸惑いながらつくりすめたり、失敗してつくりなおしたりする際にも、松田氏に個別にかかわっていただくことで、子供が“経験して知る”ことができる場も大切にしていた。

このように全面的に松田氏にご協力いただいたことで、専門的な技術、知識の伝達が可能となり、子ども達の造形的なものの方や表現によりよい変化がみられたように感じる。題材最後のまとめの場面では、松田氏のものづくりについての思いや、焼き物のよさについて語っていただく場を設定した。子ども達がものづくりの奥深さ、焼き物のすばらしさを感じ取り、今後の造形活動や生活の中で生かしたり大切にしていったりする意識をもてるようにしていけるようにした。

### ②家庭との連携

子供がつくった作品を自宅へ持ち帰り、食事の際に使ってみる課外の活動を取り入れた。保護者に協力を呼びかけ、使用し

た様子を伝えてもらったり、使用している画像を提供してもらったりすることで、家庭での様子を知ることができた。また、図画工作科の作品が生活に生かされていることを保護者に知っていただくよい機会にもなった。国立教育政策研究所が実施した「平成24年度小学校学習指導要領実施状況調査」の結果によると「図画工作科を学習すれば、普段の生活や社会に出て役立つ」という質問に肯定的に答えた子供は60%だった。図画工作科を学ぶ意味を子供達に感じ取らせていく一歩として、まずは実際に使うという行為の中で実感をもたせていきかけた。そして将来的には自分の生活を豊かにしていくために、日常の様々な造形、美術から形や色が及ぼす効果や、造形的な特徴を根拠に美しさや面白さを感じ取ることのできる姿を期待している。

#### 4 指導上のポイント

##### ①触覚・視覚を使った鑑賞活動

子供達が備前焼の特徴（釉薬を一切使用せず、1200～1300度の高温で焼成する焼締め陶。そのため手触りが比較的ざらざらしている。土の性質や、窯への詰め方や窯の温度の変化、焼成時の灰や炭などによって一つとして同じ色、同じ模様にはならない）を捉えるために、はじめの焼き物との出会いの時間にブラックボックスを用意した。各班、箱の中にはA（備前焼ではない焼き物）とB（備前焼）の2種類の焼き物を入れておき、ワークシートに触覚→視覚の順で焼き物の特徴を記入していく場を設けた。子供達はそれぞれの班ごとに異なる形状の焼き物を触ったり見たりしているが、互いの班の焼き物を見比べたり、発表内容を教師とともに整理していったりする中で、備前焼に共通する特徴を見つけ出すことができた。岡山の伝統文化、備前焼に触れることのできた時間であった。

##### ②社会科学習との関連

4年生の社会科で県内の特色ある地域の様子を学習する事例として、岡山県では、備前焼づくりがさかんな備前市伊部地区がある。本校でも岡山市や岡山県の副読本に取り上げられていることから学習をおこなっている。今回、本題材に入る前に、社会科で伊部地区で行われている「備前焼まつり」に多く人が集まることを学習問題として取り上げた。その後、図画工作科での題材をおこなうことで、作品づくりや備前焼の理解において、相乗的に有効に働くのではないかと考えた。教科間で時期をそろえて横断的に扱うことで、豊かな子供の姿を期待している。

##### ③失敗し思い通りにいかない経験の大切さとプロのサポート

粘土に触れる前の段階での子供達は「こんなカップをつくりたい」とアイデアスケッチを紙に書いて楽しみにしていた。しかし、実際にひもづくりで備前焼をつくり始めると、ほとんどの子供がひもを積み上げながら成形していくことの難しさに直面した。真っ直ぐにひもを積み上げていくことができず外へ外へと広がってしまい、ボウルやお茶碗のような形になる子供もいた。すると納得いかず何度も作り直す子供の姿が多くみられた。このような理想通りに成形できないだろうという状況は予想しており、つくるものを変更していく姿、何度も作り直し挑戦し続ける姿、どちらも励まし認めていった。松田氏も「初めてでここまでできたみんなは素晴らしい！」「カップにははならずとも、サラダボウルにもなるし、スープを入れることもできるよ」と前向きに捉えることのできる助言をしてくださり、時間がきても納得のいかない子供に寄り添い「大丈夫。今からでも作り直そう」と子供のよいものをつくりたいという思いを大切にかかわってくださった。

失敗し思い通りにいかないことは、何かをつくり出していく際にはよくあることである。しかし、うまくいかない状況をどのように乗り越えるか、どう自分自身が納得いく状態にしていくか、そういった経験も子供が成長していく中で必要だと捉えて今後もかかわり支援していきたい。

4年生の子供にとってひもづくりは少し難しいものであったが、あえて挑戦してみるよう設定した理由は、タタラづくり（粘土を板状にし、筒形にする）よりも個の違いが出やすく、「自分だけの作品」になりやすいからである。一人ひとりが異なる形をつくり出すことができ、人とは違う自分らしさを確かめやすい。実際子供の作品は形も異なり、もようの工夫も様々にみられる個性豊かな作品になっていた。どの子供も作品が焼成され手元に届くことをわくわくして待っていた。苦労したぶん、既製品にない自分だけの作品をつくり出せた満足感を得られたからだと考える。

また、授業後松田氏がすべての作品を念入りにひとつひとつひびや穴がないか確認し、補修して下さっていたおかげであることも忘れてはならない。子供達にはそういった影で唯一無二の作品を大切に扱って下さっている松田氏の思いや責任をもち仕事にかかわられる姿についても知らせている。子供が「やっぱり松田先生は上手だった」「プロの技はすごい」「自分ひとりではつくることができなかつた。たくさん助けてもらっていたんだな」と、改めて松田氏に尊敬と感謝の念を抱くことができるように、まとめでは活動を細かく過去の画像を見ながら振り返っていった。

#### 5 実践を振り返って

本実践では、多くの「本物」と触れ合うことができたことと改めて感じている。はじめに述べたように本物の芸術家と出会うこと、芸術家の技に触れること、本物の備前焼に触れること…そして、自分が実際につくった作品を実生活で使うということも「本物」に含まれるのではないだろうか。

粘土は作品をつくる段階では柔らかい。しかし焼くと縮み小さくなり、硬くなる。そしてさらに食品（子供が自分でスープやお茶、果物など自分の作品に合った食品を考えて家庭で使っている。）を入れて使用することで、口に触れることから陶器のあたたかさや厚みを実感していた。このように粘土という材料が様々な質感に変化することで、子供達は毎回新鮮な気持ちで作品に触れることができたことも、子どもの実感を伴った学びとして大変大きい。

この題材の最初から最後までかかわってくださったプロ、松田氏が最後にメッセージを子供達全員にくださった。「これからは実際に自分が見て触れたものを信じて、積極的に様々なものにチャレンジしてほしい」「あなたの作品は世界に1つ。自分だけの個性を大事にしてほしい」といった言葉に子供達がじっくりと聞き入っていた姿も印象に残っている。

これからも「本物」と出会う機会を様々な考え授業の中に取り入れながら、子どもの学びが深められるような題材・授業展開などを工夫した授業を提案していきたい。